

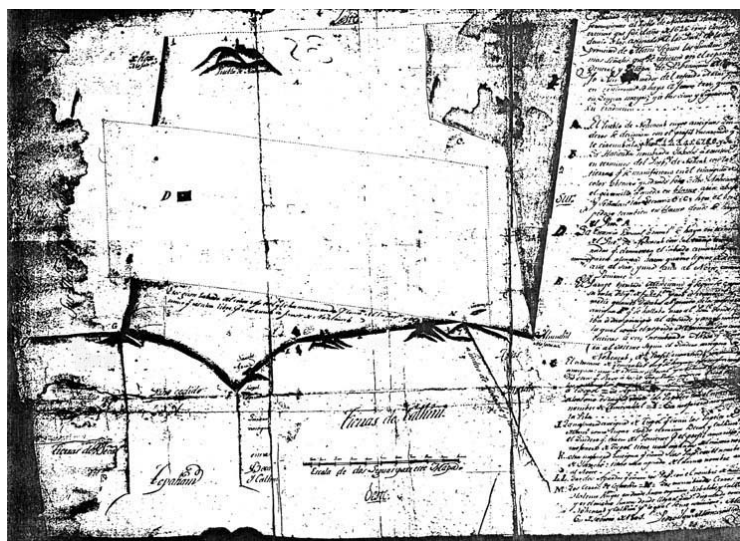


Special to the Newsletter

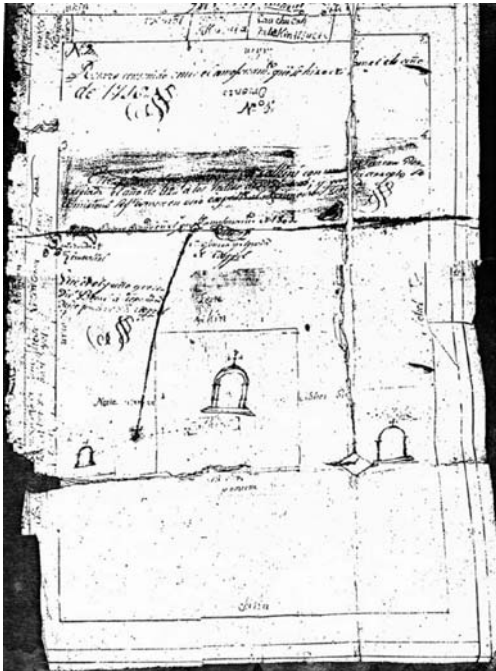
植民地時代のマヤ人の間における「合意」のありかた 空間、地図、テキスト

大越 翼

それは1800年のことであった。この年、インテンデンシア制下にあったヌエバ・エスパニーヤ副王領の南東部に位置したユカタン管区に属するノフカカブ村が、隣接するカルキニ村をインディオ裁判所に訴えた。9年前からカルキニ村の人々が自分たちの土地で耕作しているので土地が不足し、自給もままならないというのである。そこで、原告側には検察官、被告側には弁護人がそれぞれ任命され、慣例に従って両村が提出した地図(1、2)や文書の調査が開始された。その結果、検察官はカルキニ村に非があるとし、同村が提出した地図は信ずるに足りないと大いに誹謗した。一方カルキニ村の弁護人は、それは逆でノフカカブ村がずっとカルキニ村の土地を耕作していたのだ、したがって原告の告訴は成立しないとした。不思議なことに、この弁護人はカルキニ村が提出した地図には一言も触れていない。



地図1 検察官ペドロ・イグナシオ・マンサニョが描くノフカカブ村の地図(1801年)



地図2 カルキニ村の領域を表す地図

その後10年以上も続いたこの争いが、どのような結果に終わったのか定かではないが、私の関心をひくのは、なぜ検察、弁護双方がカルキニ村の地図をまやかし物と見るか、あるいは無視したのかという点である。そしてこれを調べるうちに、マヤ人が自分たちの空間を言葉によって分節するときの特徴、および描かれた地図との関連、さらにはその使われ方にまで関心が広がり、大変面白い結果が出た。

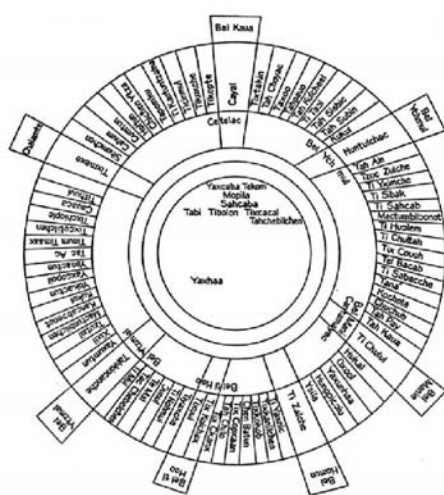
まず、この問題を考えるにあたり、先スペイン期のマヤ世界における政治領域の空間認識をもういちど確かめておかねばならない。マヤ人は、自らが占有する領域空間を対人主義に基づいて分節していた。具体的に言うと、マヤの王は、誰が自分に臣従していて、彼らがどこに居住し日常生活を営んでいるのかを

もとにして、自分の勢力範囲を策定していた。そして、その「どこ」は、必ず王のいる中心から見た形で、遠心的なまなざしで語られていたのである。むしろこの場合、臣従する者と支配する王の間の物理的距離は全く問題にされず、同時に王国領を連続した面としてとらえる必然性もなかった。また、対人主義であるからには、対地主義のもとになる土地の私有概念は、この場合機能していなかったとも考えるべきだ。力のある者とは、大勢の人々を動かすことのできる人を指すのであり、大土地所有者、大金持ちを意味しているのではなかったのである。

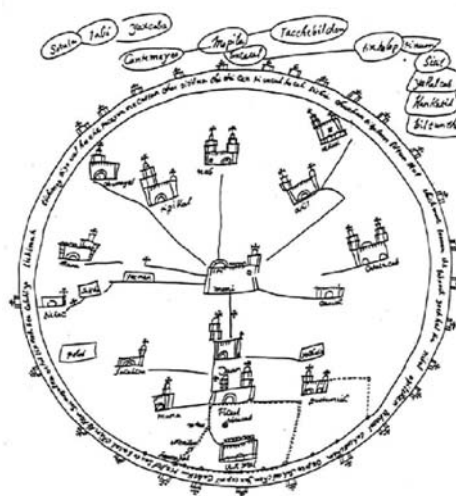
この考え方は、植民地時代にも生き残った。例えば、16世紀以降に作成されたユカタンの先住民が住む村の土地権利書には、日本語やスペイン語に訳してしまえば「境界」としか言い様のない *Xul* という単語が頻繁に用いられている。これは、単に「あるものの端」といった意味のほかに、あるところで始まった行為とそれが終わる時間上、空間上の一点をも指す言葉なのであり、したがって彼らが「私たちの村の *Xul* はどこそこにある」というときには、実際には「村長のいる場所から見た、村人の占有権が及ぶ限界点」という意味での「境界」と理解する必要があるのである。むしろこの時代には、村の土地が共有地のほかに有力者の手になるものもあったのだが、後者の場合これは占有権のみを行使しているのであって、所有権までは西欧的な意味では主張していないことには注意しなければならない。

では、この土地空間に関する概念が、どのように彼らの描く地図に表されていたのか

を見てみよう。地図3および4を見ていただきたい。地図3はソトゥタ地方を描くもので、中心部にはこれを構成する村々の名が入られ、ここから同心円が周囲に向かって描かれている。境界標の置かれた場所の地名が中心から周辺へと書かれていることに注意したい。一方、地図4はマニ地方を描いたもので、中心部にはマニ村の教会と、そこから周辺の村々に向かって通じている道路網と村の教会建築が見え、これがすべて二重の同心円で囲まれ、境界標のある地名は、同心円に挟まれた帯状の部分に見て取れる。また、地名は中心部から見たように書かれている。



地図3 ソトゥタ地方の地図

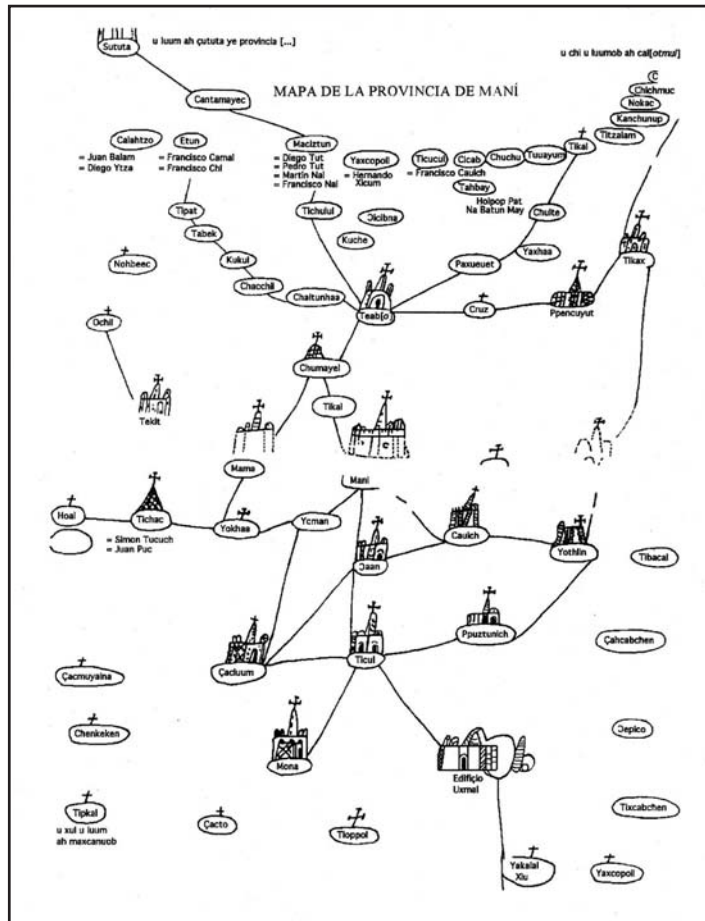


地図4 マニ地方の円形の地図

この2つの地図に共通しているのは、「権力の座がある中心」から見た周辺、つまり権力の及ぶ範囲を示したものであるということなのであり、だからこそ中心から眺めたように地名が書かれているのである。同時に、双方ともに地名が同心円の円周上に書かれていることから、中心との物理的距離はまったく等閑視されていることは明らかである。したがって、これらの地図では、中央部に描かれている村々から視覚的に割り出される各境界標のおおまかな「(地図の中心から見た)方角」と「隣接する境界標との相互関係」が最大関心事として提示されていることがわかる。

これと同様なことは、四角い、したがって私たちには見慣れた形態をした地図5にも言える。これもマニ地方を表したものだが、周辺には境界標がおかれた地名が地図の下辺から見た形で記入されている。ここでも、中心と周辺との距離はほとんど無視され、やはりおよその「方角」と「境界標どうしの相互関係、ないし順序」が、重要であったことが見て取れる。

これらの地図に見える「中心」は、副次的な意味しか持たされなかったとは言え、これを描いた植民地時代の現実を写したものであり、そのなかで彼らの領域空間の及ぶ範囲を描くことで、子孫により現実に即した形でこの重要な課題を伝えたかったのであろう。



地図5 マニ地方の矩形の地図

では、ここで19世紀初頭に起こった争いで提出されたカルキニ村の地図2を分析してみよう。その出来は、検察官が言う通りお世辞にもよいとは言えない。地図全体は四角の枠の中におさめられ、周辺の一部に境界標がおかれた場所の地名が記載されている。中央にはカルキニ村を示すために、四角い枠の中に教会の鐘楼のみが描かれ、隣接する2つの村の場合も同様である。地図1のように、縮尺もなければ正確な境界標の位置もわからない。だが、先に明らかにした植民地時代のマヤ人が作成した地図にみえる論理をあてはめると、カルキニ村の地図はまさしくその直系の子孫であることがはっきりする。ここで彼

らは、境界標が存在するおよその「方角」とその「相互関係」を最も重要な情報を、カルキニ村の役所がおかれた所（中心）から見た形で記しているのである。したがって地図2は、この村の役人にとってはその必要性にかなった「正確な」ものであったはずで、地図1と比較しても毫も遜色ないものだったのである。植民地時代のユカタンの役人にとっての「不正確」さは、マヤ人にとっては「正確」なものであり、価値観によっていかほど評価が異なる興味深い例だろう。

最後に、これらの地図がどのように見られたのかについて考えることにしよう。まず、次のことをはっきりさせておこう。植民地時代に、ある村が土地権利書を作成しようとしたときには、必ずこれに隣接する全ての村々の代表者の参加が求められ、全員の合意に基づいた境界標の設置が行われた。したがって、権利書にはこれらの参加者全員の名

前が記され、彼らは同時に境界設定に関する証人ともなったということだ。この行為が、将来にわたって村々の間で土地をめぐる争いが起こらないようにという目的のもとに行われたのだから、当然のことだろう。ところが、地図2, 3, 4, 5を比較してみると、面白いことに気付いた。地図4だけに人名が記されているのである。これらの人々は一種の「山守り」で、土地争いが絶えないところに配置されたのである。だとするならば、この地図はこれらの山守りが生きている間だけ通用する、きわめて短い期間だけの使用を前提としたものであったように思う。別の言葉で言えば、この場合の「合意」は、近隣の村々との現実の土地争いを前にして、これに具体的に対応するためのものであったに相違ない。おそらく閲覧者は当初からマニ地方の人々のみが考慮にいれられていたはずで、これは一方向からのみ眺めるように描かれているというこの地図の特徴にも反映されている。一度に1人、もしくはごく少数の人間しかこれを見ることが出来ないからである。その意味で、この地図は限定的な用途、使用法を前提にして作成されたと言えるだろう。

一方他の地図にはそのような人名の書き込みはなく、その用途は未来に向けて開かれたものであった。子孫に向けてその領域をはっきり伝えるための「合意」が得られた以上、隣接する村々の代表による閲覧をも考慮に入れねばならず、どの方向からでも眺めることが出来るということは、まさに当を得たものだった。実際、これらの地図は植民地時代を通じて何度も閲覧され、土地問題解決のために使われたし、その際には関係者一同の中央に地図が置かれるのが常だった。

植民地時代にマヤ人によって描かれた地図は、このように先スペイン期の空間認識、合意を重視した慣習を色濃く残した、しかし同時に新しい時代の現実をも取り込んで、目的に応じてその見方、閲覧できる人数が決定される、きわめて重層的な意味、使用法を持ったまことに面白いものだったのである。

(上智大学外国語学部教授)

文学の中のアメリカ生活誌(46)

新井 正一郎

Hep (博識の)、Hip (通の)、Hippie (ヒッピー) and Beat (ビート族) 1903年頃から、一部のアメリカ人はinformed (消息通の)のことをhepと言うようになっていた。1903年にはget hep (よく知っている) 1925年になるとhep to the jive (スウィングのことをよく知っている)という言い方が続々現われた。また1920年代の早い時期からジャズ、スウィングの演奏家たちは、互いにcatsと呼びあっていた。1936年から広く使われたhepcats (ジャズ狂) という言葉は、hepとcatsという2つの単語を組み合わせて、できあがったものだ。ところで、1931年までにはhepは、しばしばhipと発音された。かくして1939年頃になると、hepster (流行に通じている人)の異形のhipsterという語が作りだされた。但し、hepの由来については、はっきりしない。一言で片づけてしまえば、1945年までにhipがhepにとって代わり、catはジャズ・ファンあるいはジャズの演奏家を指す語になったということである。ついでにいうと、この頃に西海岸の前衛的なジャズのファンを意味するhipster (1941年の言葉)が英語として通用していた。これに対して知的なジャズをcool jazz (洗練されたジャズ)と言っていた。

1945年から1955年までの間に、ジャズ愛好者の意味で使われていたhipsterは、本来の意味から逸れ、いかす若者という意味になった。また熱心なジャズ通たちだけが使っていた語彙や表現　たとえばfar-out (最新の)、real gone (まったくすごい)、cool (いかす)、out of sight (とてもすばらしい)　も一般化し、若者たちはこれらの言葉を頻繁に口にするようになった。

1950年代の半ばを過ぎると、10代の若者たちは、上述以外にも人々を面喰らわせるような、耳なれない言葉をしきりに言うようになった。そのひとつにbeat (ビート族) という語彙があった。最初、この言葉はBeat (語頭のbを大文字にして)と綴られ、beat up (疲れはてた、がたのきた)を意味したが、やがて戦後のアメリカの物質文明や中産階級的な価値観に反逆し、オートバイやヒッチハイクなどで、各地を放浪する、所謂自然発生的な生き方を選ぶ超いかす若者を指す用語になった。1957年、Jack Kerouacが小説*On the Road*『路上で』で落ちぶれた姿の若者たちをbeatitude (至福)、つまり中産階級の俗物たちとは比べものならぬほど高い価値を持っている人たちと考えたことで、この語は一躍注目されるようになり、beatやbeat generation (ビート世代) という新しい語が現われた。1957年、旧ソ連による人工衛星Sputnik (スプートニク) 第1号の打ち上げ成功はまた語彙に対するアメリカ人の認識にも影響を与えた。-nik 語尾を持つ語彙がアメリカで流行したのである。その影響を受け、サンフランシスコのコラムニストHerb Caenは、1958年4月、彼等をbeatnik (ビート族のメンバー)と呼んだ。因襲を否定するナウい若者たちを指すhipsterは、1957年頃までにhippieとかhippyで通じるようになった。が、ビート族は気分だけで、真の反逆精神をもっていなかった彼等を蔑視した。中産階級の人々のhippieに対する反応はさまざまだった。flower children (フラワー・チルドレン、平和と愛の象徴である花を身につけていたことから)とかflower people (フラワー・ピープル)といえは、彼等に愛好されたヒッピーということである。彼等が気に入らない場合、beatnikという言葉を使った。一般の人々は、beatやhipster、hippyの使い分けをしなかったのか、彼等と呼ぶ場合、hippyという語を頻繁に用いた。1960年代の末頃になると、ヒッピーのコミュニティで暮らすヒッピーは依然いたが、大半は伝統的な生活に戻ってしまった。

Shakers (シェーカー教徒) Jonathan Edwards 牧師による大覚醒運動 (1736) は、既存の宗派を活性化しただけでなく、Mormons (モルモン教徒)、Christian Scientists (クリスチャン・サイエンティスト) など新しい教派を生み出した。シェーカー派もそのひとつである。これは、身体を激しく震わせて神の言葉を受け取る Prophets という 17 世紀のフランスの宗派から派生したものだ、ルイ 14 世によって追放されて、イギリスに安住の地を求めなくてはならなくなった。たどりついた先のイギリスで、彼等は過激なクエーカー教徒と結びつき、やがて Shaking+Quakers からと思われるが、Shaking Quakers (シェイキング・クエーカーズ) と呼ばれるようになった。この宗派の正式名は The United Society of Believers in Christ's Second Appearance (キリストの再臨信仰信者合同協会) であったが、1747 年には Shakers (シェーカーズ) とも言われた。

シェーカー派をアメリカにもたらしたのは Ann Lee (1736-84) である。マンチェスターの鍛冶屋の娘であった彼女が、シェーカー教徒になったのは 22 歳の頃だった。その後、彼女は宗教的神秘主義の世界を指向するようになり、31 歳の時「神は両性の原理を有しており、男性原理はイエス・キリストに、女性原理は自分に受肉している」と説くだけでなく、みずからをアン "Mother" (「母さん」) と称した。1770 年までに彼女は事実上シェーカー派を率いる地位を手にした。その後まもなく、彼女は新大陸に千年教会を建てよという啓示を受け、1774 年、夫や弟、姪など 8 人の仲間とアメリカに渡り、ニューヨークに住まいを定めた。独立戦争の間、数千人のプロテスタントの人々を改宗させたことですっかり自信をつけたと見え、彼女は家族制度や私有財産を否定する厳格な宗教規律を主唱するようになった (彼女はこの頃には夫を見捨てていた)。そして 1787 年、ニューヨーク州ニューレバノンに最初のコミュニティをつくった。このコミュニティは 1817 年には、Shaker communities、1824 年には Shaker villages として知られた。全盛期 (1825 年から 1840 年代まで) には、ニューヨーク、オハイオ、インディアナ、ケンタッキーなど 8 つの州につくった 18 のシェーカー村で暮らしていた信者の数は、6,000 人に達したが、南北戦争以後、ユートピア社会主義の共同体への熱狂の波がおさまると、この宗派も新聞に会員募集の広告を出して会員を維持するはめになった。

シェーカー派は規模は小さかったが、アメリカの英語や生活に及ぼした影響は、比喩ものにならないほど大きい。農民としての彼等が世に送りだした発明品は、次のようなものであった。threshing machine (脱穀機)、rotary harrow (回転まぐわ)、Poland China (大豚)、手動の washing machine (洗濯機)、clothespin (洗濯ばさみ)、apple parer (りんご皮むきナイフ=ジャックナイフ、1833 年に初出) など。また彼等は、ハーブや種苗をもっと儲けのある商品に一変させる方法を考案した。自分たちの名前が印刷してあるラベルのついた小さな紙袋に、園芸用の種を入れて売ったところ、これがうまくいった。製品「シェーカーの種」は売れに売れたことで、彼等は種苗市場の支配的な地位を築くまでになった。そういうわけで、今日のわれわれが使う a packet of seeds (種一包み) という語は、シェーカー教徒によってもたらされた言い方である。29 歳の時、アメリカを訪れたイギリスの作家 Charles Dickens は、自分が見たアメリカの光景を、帰国後に出した *American Notes* (1842) で再現している。次はその中の一節。They (Shakers) are good farmers, and all their produce is eagerly purchased and highly esteemed. "Shakers seed," "Shakers herbs," ... are commonly announced for sale in the shops of towns.

(天理大学国際文化学部教授)

Essay

まなざしの果ての「マヤ文明」
イメージの形成と消費に関する一考察

杓谷 茂樹

「密林に眠る謎の古代文明」「マヤ文明の神秘」。近年の考古学や文字解読の急激な進展により、「マヤ文明」に関して様々なことがわかってきているにもかかわらず、現在「マヤ文明」について語られるとき、「謎」「神秘」といった言葉は相変わらず付いてまわり、我々の想像力をかき立て続けている。それは例えば『世界遺産』『探検ロマン 世界遺産』そして『世界ふしぎ発見』などのテレビ番組などを見ればよくわかることだ。このように我々がしばしば抱く「神秘」のベールで覆い隠された「マヤ文明」のイメージはどのようにして出来上がってきたものなのであろうか。ここでは、コロンブス以降、西欧の人々のまなざしの中で「マヤ文明」イメージが形成されてゆく過程をたどり、我々の持つ「マヤ文明」イメージを再検討してゆきたい。

まず、ここでは一般に「マヤ文明」とか「マヤ民族」と呼ばれる際のこの「マヤ」という括りが、欧米からのまなざしによって歴史的に規定され、意味づけられてきたものであるということの大前提としてここに確認しておきたい。その上でマヤ・イメージの形成とその変遷の過程を追ってゆくことにする。

話はヨーロッパがアメリカを「発見」した大航海時代にさかのぼる。当然この時代にはヨーロッパの人々の頭の中に「マヤ」は存在しない。広大なアメリカをひとつのものとして見ていたのみである。当時のキリスト教中心主義的な考え方では、世界の中心であるキリスト教徒のヨーロッパは「文明」、周辺の異教徒は「野蛮」という明確な区分がなされたことは言うまでもない。そして、キリスト教的規範に反した「野蛮」な生活をおくるアメリカ人に関して述べるとき、悪魔崇拜、食人、人身御供といった非人道的イメージがしばしば強調され、時には無頭人、巨人、そして非人間的な怪物などとして描かれることもあったこともよく知られている。すなわち、この両者の対立関係の内には「ヨーロッパ：アメリカ＝キリスト教徒：異教徒＝文明：野蛮」という図式が厳然と存在し、ヨーロッパ人のアメリカ観の根底を支えていたのである。しかし、この「アメリカ＝野蛮」イメージが、自らのアメリカ征服とその植民地化を正当化するためにスペイン人によってことさらに強調され利用されてきた一方で、全く異

なったアメリカ観も存在していたのも事実である。ヨーロッパが文明化する以前の原初的な世界、すなわち旧約聖書で描かれているような「楽園」のイメージがそれである。それは社会不安の中で日常生活に汲々とし、戦争に明け暮れる文明化した本国と対照をなすイメージとして、ヨーロッパ人がアメリカに希求したものであったといえる。

ラテンアメリカ諸国が独立を果たした後の19世紀後半、欧米諸国からいわゆる探検家がやって来てこの地域を紹介するようになる。米国のステューブンスにはじまるこの動きは、銅版画、そして写真というビジュアルな方法を用いて欧米人に「マヤ」を強く印象づけ、またこれを意味づけたのであった。我々が「マヤ」を「発見」したのはこの時代といえるだろう。そして19世紀末からはこの意味づけの主役は考古学者にとってかわることになる。「マヤ」の意味づけという脈絡でいうと、この時代以降、考古学の中心にいるのはやはり欧米(特に米国)の研究者であるといえよう。モーレーやトンプソンといったビッグネームが君臨していた20世紀前半までのマヤ考古学では、静態的で単純な構造を持つ平和な社会の中で展開していたといった文明像が「マヤ」に付与されており、「神秘」のベールもまだ十分に取り去られていなかった。それは「野蛮」イメージが「謎」「神秘」というものに読み替えられ、その向こう側に「楽園」のイメージがあるということであり、「マヤ」に向けるまなざしには征服期以来の「アメリカ」イメージが維持されていたといえる。

20世紀後半になると、そうした「伝統的」イメージが変化するようになる。ひとつは公害問題の広がりから環境への関心が世界的に高まることにより「マヤ」地域に「手つかずの自然」イメージが新たに付与されたことである。そしてもうひとつは考古学研究の進展によって、「マヤ」社会がそれまで考えられてきたよりもはるかに複雑で、ダイナミックな歴史をもつことがわかってきたことである。それ以降、考古学の分野ではこの新しいイメージが議論の前提となったのは当然のことであるが、一般的なマヤ・イメージについて考えたとき、相変わらず「伝統的」なマヤ・イメージは力を持ち続けることになる。そして現在では「伝統的」イメージと新しいイメージ、そして「手つかずの自然」イメージが混在する形で、それが語られる様々なシチュエーションに応じて取捨選択され、新たなイメージの形成と消費を繰り返す

ているのである。そのことは、例えば国家プロジェクトとして観光推進が行われているカンクン・リヴィエラ・マヤ観光圏の遺跡公園で、観光客があらかじめ期待して持ってくるイメージに先回りする形で、意図的にその風景や回覧方法が操作されたり作り出されたりしているさまに見ることができる。

とても遠い存在のように感じられてきた「マヤ文明」であるが、近年の考古学の進展はそれが同じ

生身の人間の作り上げてきた文明であることを明らかにし、我々との精神的な距離感を縮めようとしている。しかし相変わらず顔を出す「謎」「神秘」という言葉はその距離感を縮めないように働く反作用となっている。このアカデミズムとロマンティシズムの絶妙なバランスの中で「マヤ」のイメージは新たに形成され、消費されているのである。

(中部大学国際関係学部助教授)

Essay

ホイットマンと骨相学

木全 滋

ホイットマンは、彼が生きた時代の流行や思想に敏感な詩人だった。特に、骨相学と呼ばれる医学言説に大きな影響を受けている。本発表では、最初に骨相学が生まれた背景を紹介し、次にホイットマンと骨相学の関わりについて述べた。

17世紀後半から18世紀にかけて、人の行動や情緒を支配し、統轄しているのが神経や脳であることが徐々に明らかになってきた。その結果、脳に対する医学者たちの関心は高まっていった。骨相学はそのような背景のもとに、ドイツ生まれのウィーンの医学者、フランツ・ジョゼフ・ガルによって構想された。彼は自分の学生たちを観察して、能力や性格によって、頭の形に特徴があることに気づいた。そこから、人の精神は複数の能力や性格(これを「特性」facultiesと呼ぶ)の集合体であり、それぞれの特性が脳の決まった場所に宿っているという仮説を立てたのだった。

ガルは、ある特性が発達していれば、その部分が肥大し、内側から頭蓋骨を押し上げるので、頭蓋のどの部分が隆起しているかを調べることによって、人の才能、適性、性格などを判別できると考えたのである。ここに、手相を見るように頭蓋骨の隆起の状態を見て人の内面を推し量ろうとする骨相学が誕生したのであった。ちなみに、同時期に流行した観相学は眼、鼻、顔などの形や配置の特徴などから人の性格、性向を知ろうとするもので、これまた19世紀文学などに極めて大きな影響を与えたことは既に詳しく研究されている。

ガルは、骨相学をあくまで脳神経科学の分野内での発見と考えていたが、これを世間の耳目を集める最新の学問として流通させたのは、弁舌さわやか

で容姿も立派な弟子のヨハン・ガスパル・シュプルツハイムであった。1832年、彼がアメリカの地を踏んだ時からアメリカにおける骨相学ブームが始まった。

骨相学や観相学が19世紀に隆盛を極めた理由を少し違った角度から説明することもできる。それは19世紀の都市の状況に骨相学、観相学への熱狂の原因を求めるものである。19世紀のヨーロッパの都市は見知らぬ者たちの作り上げる風景であった。大量の人間が都市へと大移動しようとしてひしめきあい、しばしば、飛び交う方言が人々相互の理解を妨げた。

アメリカでも事態は同様であった。18世紀末から進行していた商業と交通・運搬の革命によって、ニューイングランドの農村は疲弊し、大量の若者たちがニューヨークなどの都市へと流入していた。骨相学や観相学はそのような時代に求められた実践的な科学であった。すなわち、お互いに未知な者同士である人間たちの集団が何とかしてお互いのコミュニケーションを可能ならしめようと必死であったがゆえに生み出された道具として、また、得体の知れない人々がひしめく世界で、外見から内面をあやまたず判断するための知識として、すなわち都会のサバイバル技術として観相学や骨相学を考えることもできるのである。

19世紀中葉のアメリカでは、例えばニューヨークの商店に就職を希望する若者に対して、履歴書とともに、ファウラー兄弟による骨相学の診断書の提出を求めたケースもあった。都市の商店に就職を希望する若者の数が多くなかった時代には、信頼できる親戚や友人の推薦によって新人を雇っていればよかったが、多くの若者が地方から都市に流入し、就職希望者が殺到するようになると、どの若者を採用

すべきかという基準を持っていない商店の経営者たちは途方に暮れてしまったからだった。彼らの眼には、骨相学は強力な選抜の道具に映ったのだった。

ホイットマンはまさにアメリカにおける骨相学ブームのただ中で詩人として活躍していた。そして同じ時期に大学時代を過ごし、アメリカにおける骨相学の普及を一生の仕事としたのが、ロレンゾとオルスンのファウラー兄弟であった。彼らの出版社はホイットマンの『草の葉』初版の販売と、第2版の印刷、販売を行った。ファウラー兄弟とホイットマンの関わりの深さはこの点だけを考えても明らかなのだが、それだけではない。ロレンゾ・ファウラーはホイットマンの頭蓋骨を測定し、骨相学的診断を行っていたのである。ホイットマンは後に回想しているように、この診断を信じ、それに基づくアドヴァイスに感謝していた。

有名な初版『草の葉』の序文で、ホイットマンは科学と詩は対立するものではなく、地質学者や天文学者たちも詩を支えているのだと述べているが、彼は骨相学者も科学者たちのリストに含めている。当時骨相学は多くの人に真正の科学と見なされていたからである。また同じ初版『草の葉』の序文の別の

ところに、アメリカの詩人として必要な条件が次々と挙げられている箇所があるが、ホイットマンは様々な資質を骨相学の用語で描写している。そのことを知らないと、「慎重」、「楽天性」、「女性への愛」などと「荒々しさ」が一緒に並べられている理由がわからないだろうし、“comparison”が「分析し批判する能力」であると想像することも不可能であろう。

また、詩「青いオンタリオの岸辺で」では、アメリカの若者たち、特に職人や農夫たちのすぐれた特徴が並べられてゆく。ここでも話し方、態度、服装、友情、気前のよさなどとともに、「骨相が示す言葉の豊かさや決断力」や「異性への愛の強さ」が挙げられている。後者は英語で“the large amativeness”となっており、骨相学の診断書の言い方がそのまま使われているのである。

19世紀アメリカは熱狂的な改革の時代だった。骨相学は、自己をより良く知った上で自らを変え、社会をより完璧なものに変えていきたいという当時のアメリカ人の夢に答えようとした。だからこそ、ホイットマンを含むアメリカ人はこれほど骨相学に魅了されたのだった。

(愛知県立大学助教授)

Essay

チャベス・ポリール革命政権下における 「農地革命」の現状

林 和宏

ベネズエラにおける土地所有制度は極めて不平等なもので、人口の5%に該当する少数派が農地の75%を所有する不均衡な状態が続いてきたとしばしば指摘される。作家リチャード・ゴットは、ともに散策した農村部で、チャベス大統領がこうした不均衡に幼少期より抱き続けてきた違和感を吐露した瞬間を書き付けている。ベネズエラでは、60年代に農地改革が実施されたものの、種子や農具購入のための農民に対する融資へのアクセス、技術支援及びマーケット調査等の必要情報の欠如より失敗に終わり、分配された土地が再度元の地主により買い戻されることとなった。1999年に組閣したチャベス政権は、土地所有権の獲得こそ人間の尊厳を回復するための重要な方法であるとし、2001年の大統領授権法を利用し、同年11月12日(12月10日発効)には土地・農業開発法を成立させた。同法に基づき

2002年1月に設立された国家土地院(INTI)は、土地無し農民への農地分配等の土地所有問題の管轄、農民に対する技術及びインフラ援助、マーケット戦略に則った農地経営の指導をその役割とすることが期待された。チャベス大統領は、農地所有問題とともに食糧自給、主権の回復を含めた農地改革を国の基幹産業である石油部門に並ぶ戦略的部門として位置づけ、INTI初代長官に実兄であるアダン・チャベス氏(現大統領府大臣)を任命している。

チャベス大統領は、2003年2月4日INTI事業の一環として「サモラ・ミッション」を立ち上げた。同ミッションの目的は、平等や社会正義という哲学に則り土地の再分配を行うことにより、持続可能な農業開発を実現しようというものである。零細農に政府所有地や接収した遊休地を分与し、生産向上を目指すとともに、食糧安全保障(food security)、経済的自給制度の確立及び輸入農産品への依存状態を脱却することがその主眼に置かれ

ている。農地を希望する農業従事者は、I N T I より同人の経済状態、農地経営に対する意欲を証明する「農地譲渡証明書 (carta agraria)」の発行を受けることにより農地を入手するとともに、低利の政府系ローンへのアクセスが可能となる。同年末までに政府は9千通の「農地譲渡証明書」を6万家族に発行し、550万ヘクタールの農地が譲渡された。

石油産業主導のベネズエラ経済において、特に70年代の石油ブーム以降、政府は農業開発を等閑視したため職を求めて多くの人口が都市部に移住するという状態に陥った。現在では約2千7百万の人口の内87%が都市在住者であるとされる。これにより、ベネズエラの有する資源、人口、富が一部の都市に集中し、GDPに占める農業部門の割合も6%へ低下するという不均等発展が進展する。チャベス大統領は、農業開発の再興と都市部の人口過密を憂慮し、2003年3月20日「帰農プロジェクト」を立ち上げた。これにより23家族がカラカスからララ州ロス・アルポリートの23ヘクタールの農地へと移住した。現政権は、こうした農業人口の拡大により2007年までに食糧生産を倍増させる旨発表した。農地における貧困問題、既に都市部で形成されたコミュニティ・ネットワークからの引き離しに対する拒否感もあり、同プロジェクトの進展状況は芳しいとは言えない。

2001年成立の土地・農業開発法は、一定規模以上の土地(土地の肥沃度により異なるが、最も良質な土地の場合、100ヘクタール以上の土地がラティフンディオとして政府による接收の対象となる)が遊休地である場合、それを接收可能な旨規定しているが、政府の裁量で土地の接收が行われる可能性を懸念した経団連、農牧畜業関連団体、労組等が強く反発したため事実上、土地接收は2004年末になるまで大規模に実施されることはなかった。しかし、2004年12月9日に、ランヘル・コヘーデス州知事が新たな土地分配制度の確立、生産活動の分散化、総合的な農村開発の促進を柱として、州内16の大規模私有地を接收する旨の州知事令を発出すると、与党側の各州知事がこれに呼応し、全国レベルでの土地接收に関する知事令が発出された。更に翌年1月10日に、チャベス大統領は農地改革に関わる大統領令を公布し、「サモラ・ミッション」を発足させ、国軍をも動員し、「未使用」大土地私有地の

接收を開始するなど大規模な反ラティフンディオ運動が開始された。

2005年5月18日には改正土地・農業開発法が公布され、政府による遊休地接收に関する細則が設定された。同法は、憲法第305条に明記されているように、国民の食糧安全保障という観点から、農地が公共的利用・社会的利益に資するよう活用されるべきであるとの原則に立っている(第68条)。同法の重要な点は、所有者にI N T Iに出頭しその土地が遊休地ではない旨証明するよう義務付けているところである(第41条)。同証明書には、農地の規模、地質、耕作物の品目等が記載され、土地の未登記を政府が一元的に管理し、不正登記を取り締まっていくことを目指している。また、こうした土地分析の結果、I N T Iにより同農地が「非生産的」であると判断された場合、所有者は通知後20日以内にI N T Iに同土地が改良可能であることを証明する書類の発行を申請せねばならず、この期限を過ぎると接收の対象となる(第47条)。更にこの期間、同農地で働く借地人、折半小作農等はその土地が譲渡の対象となる等の決定がなされるまで同地に留まることを認められている(第18条)。このように政府側の農地(所有者)に対する規制は本改正をもって更に強固なものとなったと言える。

2005年後半から2006年にかけて農地接收の話題はかなり頻繁に耳にするようになってきている。しかし、実質はまだ緒に就いたばかりである。反ラティフンディオ運動はチャベス政権における一大中心課題で、毎週日曜日チャベス大統領自身がパーソナリティを務めるテレビ・ラジオ番組「アロープレシデンテ」では頻繁に扱われる。ハウア農業・土地大臣にはいつものように叱咤激励が飛ぶ。しかし、接收された土地での生産性が落ちているとの反政府側の報道があったり、外国企業所有の農地接收が当該政府の抗議により賠償金支払い問題に発展するなど不透明な点が多い。また、そもそも「ラティフンディオ」なるものの基準が不明瞭であるとの理由から接收の対象が不明確で、恣意的であるとの指摘もある。チャベス革命の背骨であるこの「農業革命」がどのような行く末を歩むのか今後注目されるところである。

(在ベネズエラ日本大使館専門調査員、本稿における見解は著者個人のものであり、外務省並びに在ベネズエラ日本大使館の見解を代表するものではない。)

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる11月25日(土)13:00から天理大学研究棟で、第11回年次大会を開催します。年次大会当日は、会員総会、研究発表、講演会の順で以下のスケジュールで進行します。

記

天理大学アメリカス学会第11回年次大会

と き：2006年11月25日(土)

ところ：天理大学研究棟 第1会議室

(研究棟3階北側)

会員総会：13:00

研究発表：14:00

森下和彦(前同志社大学嘱託講師)

「マーク・トウェインのアメリカン・ドリーム」

記念講演：15:00

立林良一(同志社大学助教授)

「マリオ・バルガス＝リヨサに見られるメタフィクション性」

なお第11回年次大会の記念講演には、会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々の来場も歓迎します。入場は無料です。

アメリカス学会新入会員

(2006年11月10日現在、敬称略)

一般会員＝朴 珣英(7月)、林 和宏(8月)、
合田あさ子(8月)、中西みどり(8月)。

編集後記

巻頭言の大越翼氏(上智大学教授)には、本年1月30日の特別講演会において、マヤ歴史学の最先端のお話をさせていただきました。内容については巻頭言をお読みいただきたいと思います。内容についてはひとことご紹介いたしますと、マヤ人の空間認識がどのように植民地時代の地図に表されているのかというテーマであります。そして、そこには征服以前のマヤ人の空間認識が色濃く残されているということを実際の地図を見せていただきながら丁寧にお話しさせていただきました。複数形のアメリカ＝「ア

メリカス」学を追求する当学会にふさわしい内容に、会場は興奮気味でした。

7月15日開催の研究会における、杓谷茂樹(中部大学助教授)、木全滋(愛知県立大学助教授)両氏の発表要旨に加え、林和宏氏(在ベネズエラ日本大使館専門調査員)からもご寄稿をいただき、今回のニューズレターは増頁・盛りだくさんとなりました。

来る年次大会では、同志社大学から立林良一、森下和彦両先生をお迎えすることとなりました。格調高い文学のお話を伺えるものと思います。多数のご参加をお待ちします。

通常、年次総会の時期に発行しております当学会紀要『アメリカス研究』の編集作業が遅れております。年度内の3月末には発行予定です。投稿して下さった会員をはじめ、みなさまにご迷惑をおかけしますことをお詫び申し上げます。今しばらくお待ちください。

当学会の年会費(一般会員)は、5千円です(入会金はありません)。納入は、郵便局で下記の口座にお振込みお願いいたします。

口座番号：00900 - 5 - 70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 55：2006年11月10日発行)

編集者：新井 正一郎

〒632 - 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/